

第7話：別の経済の話しよう…

足元の笹野プレリウド広場には、黄金の綿毛が、辺り一面に散らばっていた。高値で売れるというミク言葉を思い出して、広場の片隅の小屋から、掃除道具を、拝借すると、それを使って、羊毛を、全て、かき集めていた唱太は、一仕事を終えて、ベンチに横たわっていた彼女が、ようやく、気がついたのを見やって、少し離れた場所から、彼女に尋ねた。

「なあ。ミクさん。」

「何でしょう？ ちなみに、ボクは、ミクちゃん♥ です。」

「行くとこ、あるのか？」

ミクは、首をふると、いいえ。どこにも。とつぶやく。
唱太は、彼女に笑いかけると、自宅に来るように誘った。
ミクは、しばらく考えてから了承する。
唱太とミクは、お互いに笑いあいながら、一路、唱太の家をめざした。

そういえば…。と、唱太は尋ねる。

「なあ。ミクさん。」

「……。」

「なあ。ミクちゃん♥」

「はい。何でしょう？ マスター。」

「この綿毛、幾らで売れるんだ？」

「その量でしたら、百京 …。」

「百京 …！？」

「ふにゃお？」

唱太の頭の中に、¥マークと一の後に、零が十八個並んでいく。

明るい未来キターと思ったら、
次のミクの言葉に、目が点になった。

「...リョウですね。よかったですね、マスター。大金持ちですよ。」

にこっと微笑んで、ミクは唱太に話した。
本当に喜んでいるようだ。

「.....。何？ その、リョウって？」

派手にずっこけながら、唱太はミクに問い正してみる。
話が、ずれているようだ。
何を不思議そうな顔をしているんだとでもいうように、
ミクはこともなげに言う。

「ですから、ここ、神奏日本の通貨単位じゃないですか？」

「へっ？何処の国。神奏日本って？」

「ここは、神奏日本じゃないんですか？」

「いや、日本は日本だけど、違うよ。」

「えっ...。」

そういったきり、ミクの動きが止まってしまった。
ミクの顔の前で手のひらをひらひらさせてみる。
しばらくすると、やっと、動き出した。声が震えている。

「えええっ！ち、違うんですか？」

「 だから、
違うっていったるじゃないか。」

「 じゃあ、ここ、どこなんですかあ？ 」

「 ミク、落ち着いて、ここは、日本。
地球の極東にある日本国。」

「 てっきり、
神奏日本だとばかり思っていました。」

よよよ、とミクは泣き崩れ、
申し訳なさそうな顔を試みせた。

「 となると、その綿毛の値段ですが」

「 何？もしかして、若干、値上げするとか？ 」

「 コールセンターに問い合わせてみますね？ 」

コールセンターって、
どこのコールセンターだよとか、
つつこみを入れたかったが、
とりあえず、留保することにする。
ミクは、ヘッドセットを操作して、
どこかと連絡をとっているようだ。
はい、はい、そうですか、
とかいいながら、顔が曇ってくる。
あまり、いい結果ではないようだ。
それでも、交渉して、少し顔が明るくなる。
社交辞令を交わした後、唱太に説明する。
転送の術でも使ったのか、綿毛は消えていて、
かわりに、小切手帳が 現れていた。

「 とりあえず、
向こうで買い取ってくれるそうです。」

百京リョウで ...。小切手で渡すそうです。」

そういつて、唱太に小切手帳を渡した。
それを手にとってから、不服そうに、

「でも、こっちじゃ使えないんだろ？」

小切手ということは、束になった紙を見ればわかるが、
ぱらぱらと捲ってみても、使っている文字が異なるため
に、唱太には、読むことすらできない。

「いえ、こちらの通貨レートに、あわせれば大丈夫かと。」

唱太は、換金できるのかよと、期待に満ちた瞳で、ミクに尋ねる。

「ちなみに、1リョウ は、幾らになるの。」

「ええと、五十京分の一厘ですね。」

「わかりやすくいうと？」

これですね、と穴の開いたニッケル製の
小さなコインを取り出した。

目が、点になる。五円玉？
うそでしょ？と、瞳で尋ねてみる。

ミクは、にこにこと、機嫌よさそうに笑っている。

「すごいですねえ。お金持ちですよ。マスター。」

どうやら、物価高で、そんなことならしい。
昔は、1:1の 換金率だったらしいが、
そういえば、小切手帳は、どこにいったんだろう？
向こうの商品を仕入れて
金にすれば・・・ いくらかでも・・・

「あのお、ミクさん？小切手帳は？」

「えっ、ですから、これですよ。」

と、五円玉をみせる。
マスター、ここのお金で欲しがっていたから、
換金しましたよ。と続けて話している。
どうやら、こっちのお金を欲しがったことが、
ミスだったらしい…。

「あのお、ミクさん。
この、お金。また、小切手にするってことは…。」

「無理ですよ。換金は一度だけですから。」

大暴落を起こした状況で、
2人と1匹を養っていかなくてはいけないらしい。
唱太は、頭をかかえながら、自宅への道を、ミクと歩いていった。

ちなみに、ノイズに憑依された
酔っ払い、その後、幸せな人生を送れたらしい…。
が、それは別の話。

《 つづく 》